第31回夏期福音特別集会（4）（伊東）
モーセの歌　羔の歌　ハルマゲドンの戦
――ヨハネ黙示録第15～16章――

１９８４年７月22日
小池辰雄

義の涙・義の血　モーセの歌　出我　羔の歌　祭司であり王者である　憤恚の鉢　何が本当の本当か　ハルマゲドンの戦い　真理に即如

【ヨハネ黙示録15】

1我また天に他の大いなる怪しむべき徴を見たり。即ち七人の御使ありて最後の七つの苦難を持てり、神の憤恚は之にて全うせらるるなり。

2我また火の混りたる玻璃の海を見しに、獣とその像その名の数字とに勝ちたる者ども、神の立琴を持ちて玻璃の海の辺に立てり。3彼ら神の僕モーセの歌と羔羊の歌とを歌いて言う『主なる全能の神よ、なんじの御業は大いなるかな、妙なるかな、万国の王よ、なんじの道は義なるかな、真なるかな。4主よ、たれか汝を畏れざる、誰か御名を尊ばざる、汝のみ聖なり、諸種の国人きたりて御前に拝せん。なんじの審判は既に現れたればなり』

5この後われ見しに、天にある証の幕屋の聖所ひらけて、6かの七つの苦難を持てる七人の御使、きよき輝ける亞麻布を著、金の帯を胸に束ねて聖所より出づ。7四つの活物の一つ、その七人の御使に世々限りなく生きたもう神の憤恚の満ちたる七つの金の鉢を与えしかば、8聖所は神の栄光とその権力とより出づる煙にて満ち、七人の御使の七つの苦難の終るまでは誰も聖所に入ること能わざりき。

【ヨハネ黙示録16】

1我また聖所より大いなる声ありて七人の御使に『往きて憤恚の鉢を地の上に傾けよ』と言うを聞けり。

2斯て第一の者ゆきて其の鉢を地の上に傾けたれば、獣の徽章を有てる人々とその像を拝する人々との身に悪しき苦しき腫物生じたり。

3第二の者その鉢を海の上に傾けたれば、海は死人の血の如くなりて海にある生物ことごとく死にたり。

4第三の者その鉢をもろもろの河と、もろもろの水の源泉との上に傾けたれば、5われ水を掌どる御使の『いま在し昔います聖なる

者よ、なんじの斯く定め給いしは正しき事なり。6彼らは聖徒と預言者との血を流したれば、之に血を飲ませ給いしは相応しきなり』と云えるを聞けり。7我また祭壇の物言うを聞けり『然り、主なる全能の神よ、なんじの審判は真なるかな、義なるかな』と。

8第四の者その鉢を太陽の上に傾けたれば、太陽は火をもて人を焼くことを許さる。9斯て人々烈しき熱に焼かれて、此等の苦難を掌どる権威を有ちたもう神の名を瀆し、かつ悔改めずして神に栄光を帰せざりき。

10第五の者その鉢を獣の座位の上に傾けたれば、獣の国暗くなり、その国人痛みによりて己の舌を齧み、11その痛みと腫物とによりて天の神を瀆し、かつ己が行為を悔改めざりき。

12第六の者その鉢を大いなる河ユウフラテの上に傾けたれば、河の水涸れたり。これ日の出づる方より来る王たちの途を備えん為なり。13我また龍の口より、獣の口より、偽預言者の口より、蛙のごとき三つの穢れし霊の出づるを見たり。14これは徴をおこなう悪鬼の霊にして、全能の神の大いなる日の戦闘のために全世界の王等を集めんとて、その許を出でゆくなり。15（視よ、われ盗人のごとく来らん、裸にて歩み羞所を見らるることなからん為に、目を覚してその衣を守る者は幸福なり）16かの三つの霊、王たちをヘブル語にてハルマゲドンと称うる処に集めたり。

17第七の者その鉢を空中に傾けたれば、聖所より、御座より大いなる声いでて『事すでに成れり』と言う。18斯て数多の電光と声と雷霆とあり、また大いなる地震おこれり、人の地の上に在りし以来かかる大いなる地震なかりき。19大いなる都は三つに裂かれ、諸国の町々は倒れ、大いなるバビロンは神の前におもい出されて、劇しき御怒の葡萄酒を盛りたる酒杯を与えられたり。20凡ての島は逃げさり、山は見えずなれり。21また天より百斤ほどの大いなる雹、人々の上に降りしかば、人々雹の苦難によりて神を瀆せり。是その苦難甚だしく大いなればなり。

●義の涙・義の血

いよいよ、第四楽章です。私は聖書を耳で読みます。そうすると、もう、しゃべるのが嫌になる…（異言）…。ヨハネ黙示録第15章に入ります。

1我また天に他の大いなる怪しむべき徴を見たり。即ち七人の御使ありて最後の七つの苦難を持てり、神の憤恚は之にて全うせらるるなり。

「神さまは憫み深く、怒ることがおそい」

と聖書の中にありますが、いよいよ最後になると、神の憤恚、羔の怒りとなる。これはど

ういうことですかね。聖書を貫いている脊椎骨は義です。この義が爆発する。これが神の憤恚・羔の怒りです。パウロもローマ書でそのことに触れています。ところが、この義が爆発する前に義は涙しました。血を流しました。それがキリストの十字架なんです。神さまが涙し、血を流し、キリストを屠って、（人類を）赦した。この赦しは、口で赦したのではない、生命をもって赦した。キリストの十字架の贖いの愛が即ち、この義の涙であり、義の血であった。この義の涙・義の血であるキリストの十字架という愛を受けとらない。それで、ついにこの義が爆発するんです。それが神の憤りであり、羔の怒りです。再びキリストは十字架に架かりません。人類は今、その十字架を無みして、原爆戦争に爆発しようとしている。それは神の憤り、羔の怒りです。神さまは怒りたくも、憤りたくもない。けれども、ついに、止むにやまれず、そういうことになる。それを自ら招くのが、この背ける人類だ。それはサタンの手下になったからです。旧約聖書に、

「エホバは妬むほどに愛したもう」

とある。

「サタンにお前たちを取られてたまるか」

というのが、この妬みの愛です。ヤコブ書にも出てきます。私たちは、生命を賜っているということは、存在を賜っていることは、それだけ神さまの大関心事になっている。人ひとりの存在は全世界とも比較ができない。そういう絶対矛盾の真理なんです。

孔子も或る時こう言いました、

「余は言うことなからんことを欲する」

と。孔子という人は宗教的な人ではありませんけれども、

「もう言葉に絶っした」

という意味です。論語の素晴らしさというものは、やはりそういう孔子の魂から出ているということも言えるわけです。こういう事態を私は冥想していると、私も本当に

「言うなからんことを欲する」

で、何も言いたくなくなる。問答無用です。

●モーセの歌

2 **我また火の混りたる玻璃（はり）の海を見しに、獣とその像その名の数字とに勝ちたる者ども、神の立琴を持ちて玻璃の海の辺（ほとり）に立てり。**

「その名の数字」「六百六十六」は「皇帝ネロ」の隠れた言葉です。ヘブライ語の数値からくる。

3 **彼ら神の僕モーセの歌と羔羊の歌とを歌いて言う『主なる全能の神よ、なんじの御業は大いなるかな、妙（たえ）なるかな、万国の王よ、なんじの道は義なるかな、真（まこと）なるかな。**

素晴らしい言葉です。文語訳はいいね。「モーセの歌」とは出エジプト記15章です。

「1是に於てモーセおよびイスラエルの子孫この歌をエホバに謡う。云く、我エホバを歌い頌ん彼は高くいますなり、彼は馬とその乗手を海になげうちたまえり。

エジプトの軍勢が紅海で溺れてしまった。モーセが手を上げれば海が分かれたり、下げれば水がくだったりした。

2わが力わが歌はエホバなり。彼はわが救拯となりたまえり。

これは詩篇118篇にも同じ言葉がでてきます。

「わが力わが歌はキリストなり。彼はわが救いとなりたまえり」

ということです。いい言葉ですね。

彼はわが神なり。我これを頌美ん。彼はわが父の神なり。我これを崇めん。

3エホバは軍人にして其名はエホバなり。

不思議な言葉です。「軍人」とは、悪魔との戦いです。

4彼パロの戦車とその軍勢を海に投げすてたもう。パロの勝れたる軍長等は紅海に沈めり。5大水かれらを覆いて彼等石のごとく淵の底に下る。エホバよ汝の右の手は力をもて栄光をあらわす。6エホバよ汝の右の手は敵を砕く。7汝の大いなる栄光をもて汝は汝にたち逆う者を滅したもう。汝怒りを発すれば彼等は藁のごとくに焚つくさる。8汝の鼻の息によりて水積みかさなり、浪堅く立ちて岸のごとくに成り、大水海の中に凝る。

エライ言葉だね。

9敵は言う、我追うて追いつき掠取物を分かたん、我かれらに因てわが心を飽かしめん、我剣を抜かん、わが手かれらを亡ぼさんと。10汝気を吹きたまえば海かれらを覆いて彼等は猛烈き水に鉛のごとくに沈めり。

そんなことを傲慢に言っていたが、どっこい、神さまの方はすっかり彼らを水の中に沈めてしまったという。

11エホバよ神の中に誰か汝に如ものあらん、

「誰か神に如かん」というのが「ミカエール」という言葉です。

誰か汝のごとく聖くして栄えあり讃うべくして威あり奇事を行なう者あらんや。12汝その右の手を伸べたまえば地かれらを呑む。13汝はその贖いし民を恩恵をもて導き汝の力をもて彼等を汝の聖き居所に引きたもう。

14節あたりから、この歌の後編になっている。ここのところはモーセの歌ではないけれども、「モーセの歌」とされている。

14国々の民聞きて慄え、ペリシテに住む者畏懼を懐く。15エドムの君等駭き
モアブの剛者戦慄く、カナンに住める者みな消えうせん。16畏懼と戦慄かれ

らに及ぶ。汝の腕の大いなるがために彼らは石のごとくに黙然（もくねん）たり。エホバよ汝の民の通り過ぐるまで汝の買いたまいし民の通り過ぐるまで然るべし。
17 汝民を導きてこれを汝の産業の山に植えたまわん。エホバよ是すなわち汝の居所（すみか）とせんとて汝の設けたまいし者なり。主よ是汝の手の建てたる聖所（きよきところ）なり。18 エホバは世々限りなく王たるべし。」（出エ15・1～18）

●出我

ことに前半の所が出エジプトのところを歌っている。出エジプトの記事そのものは14章です。

「13 モーセ民にいいけるは汝ら懼（おそ）るるなかれ、立ちてエホバが今日汝等のために為したまわんところの救いをみよ、汝らが今日見たるエジプト人をば汝らかさねて復これを見ること絶えてなかるべきなり。14 エホバ汝等のために戦いたまわん。汝等は静まりて居るべし。」（出エ14・13～14）

これは詩篇46篇と相呼応するところです。

「懼（おそ）るるなかれ」

とはよく出てくる。次元の違ったところにいる時にみな恐がる。この集会でも、烈しい祈祷会に来ると、これに慣れない人は恐がる。けれども、そのような現実を突破すると、本当の世界に、恐れなき世界に入る。本当の平安の世界に入るんです。

それを普通のキリスト教は何だかんだ言うけれども、そんなことではダメなんだ。それだったら、使徒行伝のペンテコステはどうしてくれるんだ。各人の上に火が降ったではないですか。今のキリスト教は気がぬけている。我々は、キリストの直弟子たちが本当に火をもって鍛えられた――もちろん、霊的な火です――その中に入ると、すべてのものが見えてくる。何をしても、本当に力が出てくるし、楽しい。

「汝等は静まりて居るべし」

とはただ静まっているのではない。

「沈黙の祈りの中に入れ、そして神の力に与（あず）かれ」

ということです。祈りで深い沈黙に入ると爆発する。体裁ではない。

モーセは、ただ英雄だから、やったのではない。

「私はそんなことはできません」

とモーセは言ったんだ。神さまが、

「私がお前と一緒にいるから」

と言ったから、

「それでは、行きます」

と。これが「モーセの歌」です。特に出エジプトというイスラエルの歴史の決定的な最初

の贖いです。出エジプトと出バビロニヤと二つあるわけだ。これは出エジプトの歌です。もう一つは出バビロニヤ、これは第二イザヤが歌っている事態が出バビロニヤの時です。民族的な罪からの贖いのこと、これが第二イザヤの消息ですから。出エジプトは苦難からの解放。出バビロニヤは罪からの解放です。

キリストにより頼むと、我々は個人的に出エジプトと出バビロニヤをさせられる。それが「出我」、生まれつきの我からぬけることです。

「人新たに生まれずば、神の国に入ることができない」

とキリストが言われたのがそのことです。単なる悟りではない。

聖書を冥想していると、もう、私は全身が燃えてしょうがない。火なんです、私は。

「私より後に来るひとは聖霊と火でバプテスマをするひとだ」

と洗礼のヨハネが言ったではないですか。そのとおりなんです。キリストは聖霊と火、霊的な火をもって、霊火をもって、また、本当に真清水をもってバプテスマなさる。火と水は普通は相容れないというが、相容れないではない。「絶対矛盾の自己同一」なんです。もののごとを概念的につかまえている人は、いつまでたってもダメですよ。そこにおいて、「火」の内実は何か、「水」の内実は何かと、その言葉の奥を把まないと。何とも言えないですね、これは素晴らしい輝かしい神秘の世界です。

●羔の歌

それから今度は「羔の歌」です。

3 **彼ら神の僕モーセの歌と羔羊の歌とを歌いて言う『主なる全能の神よ、なんじの御業は大いなるかな、妙（たえ）なるかな、万国の王よ、なんじの道は義なるかな、真（まこと）なるかな。**

こう言っているときに、この歌の内容は既にイスラエルの歴史を想っている。神の歴史において現れているところの

「御業は何と大いなるかな、妙なるかな」

ということです。

「万国の王よ、なんじの道は義なるかな、真なるかな」

これはさっき言った義の世界です。聖書の宇宙観と聖書の救済観が表れているわけです。

私は、

「聖書は驚嘆驚倒して読む書なり」

と書いた。聖書は驚嘆しぶっ倒れて読む本なんだ。ぶっ倒れて、

「降参しました、参りました！」

と言わなければ、この現実の中には入れない。分かるの分からないのという、そんなことではない。困ったものだ、いつまでたっても、聖書研究会なんてやっているから。

「真（まこと）」は「アーメン」という字です。

「セデック（義）なるかな、エメツ（真）なるかな、アーメンなるかな」ということ。

「聖書の世界は本ものだ」

ということです。これは本ものの世界です。この花は本ものです。造り花はいくらきれいだって、ダメなんだ。花は虫にくわれていたって、何だっていいよ、本ものだから。

4主よ、たれか汝を畏れざる、誰か御名を尊ばざる、汝のみ聖なり、諸種（もろもろ）の国人（くにびと）きたりて御前に拝せん。なんじの審判（さばき）は既に現れたればなり』

これはなんと素晴らしい言葉ですかね。

黙示録5章に、

「9斯て新しき歌を謳（うた）いて言う『なんじは巻物を受け、その封印を解くに相応（ふさわ）しきなり、汝は屠（ほふ）られ、その血をもて諸種（もろもろ）の族（やから）・国語・民・国の中より人々を神のために買い、

「買い」とは人々を「贖いとり」ということです。

10之を我らの神のために国民となし、祭司となし給えばなり。彼らは地の上に王となるべし』」（黙示録5・9～10）

という不思議な言葉がある。これがやはり「新しき歌」なんです。ここのところが大変応ずるところです。

●祭司であり王者である

ここに「民を祭司となし」「地の王とした」と不思議なことが書いてある。クリスチャンは祭司であり王者であるということです。マルチン・ルターが、

「全てのキリスト者は祭司である」

と言ったのはここから来ている。ルターの『クリスチャンの自由について』には、

「キリスト者は万物に王たるもので、何者にも属しない。また、キリスト者は奴隷であって、全ての者に従う」

と書いてある。絶対矛盾の自己同一を言っている。キリスト者は絶対に自由だと。王者ということは、何者にも依存しないのだから。従わないんだから。

何故そうかということをルターははっきり書いてないから、私は言うんです。キリスト者はなぜ「王者」かというと、実は、ここにもうひとつ別な王者がいる。キリストです。

「諸々の王の王なるもの」

という霊界の王者です。我々はこれの僕なんです。「主さま！」と言うのはそのことです。キリストは「主」なんです。我々は「僕」です。僕だから、使命的存在です。主の命令にこれ従う、御意にこれ従う。

それはキリストがやっていたんだ。

「汝の御意をなさせたまえ。どうぞ私を通してやってください」

と。キリストの実存はそれなんだ。神さまの命令に絶対服従していた。ところが、その絶対服従の僕の姿が、本当は自由である。何となれば、相手は絶対者だから。絶対なものがここで動いている。絶対者の意志は絶対なものだから、それが動いているのだから、これは自由なんだ。

こっち側で

「自分は自主だ」

なんてやっているのは、そんな小さな自主なんてものはどうにもならん。みな行き詰まってしまう。我欲に行き詰まる。それをエゴイストと言う。どんなに立派そうにみえても、そんなことではダメです。もっと次元が違う。これは平伏しの魂なんです。平伏しの魂が本当に自由なんです。サタンはこの王者を認めないで、自分を手放しで王と思っている。サタンの王者は傲慢なんだ。だから、やっつけられる。傲慢は最大の罪です。

「祭司」というのは何かというと、人のために執り成す。僕となっているから、上からの御意によって、愛によって、その義をその愛を人々に伝えていく。これが祭司です。絶対矛盾でも何でもないわけです。これは本当にこの両面がなければ、真理は欠ける。これで真理は全しというわけだ。

「汝の道は真なるかな」

とはこのことです。

「汝の道は、王者として祭司たるところの道は、真（まこと）なるかな」

ということは真に真理です。本当の真は必ず実現するんです。実現しなければ、それは真でない。観念になってしまうから。

だから、いい加減なクリスチャンはそれがダメなんだ。我々だって、決していいとは言わない。限りなくそれを鍛えられていかなければダメです。もちろんそうです。

「何ものでもありません」

と言って、キリストに力づけられる。躓いたり転んだりしますよ、人間だから。けれども、いつも平伏しの魂で進まざるをえない。決して後退しない。

そういうのが、

「王者であり祭司である」

ということ。これが黙示録の「新しき歌」なんだ。これが、

「義なるかな、真なるかな」

ということ。だから、今の黙示録5章9～10節はここのところと決して離してはダメです。

それを実践して、傲慢な、聖霊に逆らっている者に対して最初に戦ったのがステパノです。彼は本当に棄石になった。パウロはやがてやっつけられて、

「ああ、ステパノは私を立たせた」
ということになった。ルターの前にフスがいた。みな、血を流した先駆者です。天では生命を捨てた人が最高のところにいる。

4主よ、たれか汝を畏れざる、誰か御名を尊ばざる、汝のみ聖なり、諸種の国人きたりて御前に拝せん。なんじの審判は既に現れたればなり』

「畏れる」と「尊ぶ」とは別な言葉ですけれども、同じ内容です。

5この後われ見しに、天にある証の幕屋の聖所ひらけて、6かの七つの苦難を持てる七人の御使、きよき輝ける亞麻布を著、金の帯を胸に束ねて聖所より出づ。

「出会いの幕屋」とか或は「律法の幕屋」とかいろいろありますけれども、「証の幕屋」は出エジプト記38章、民数紀略9章のところに出ています。

7四つの活物の一つ、その七人の御使に世々限りなく生きたもう神の憤恚の満ちたる七つの金の鉢を与えしかば、8聖所は神の栄光とその権力とより出づる煙にて満ち、七人の御使の七つの苦難の終るまでは誰も聖所に入ること能わざりき。

これは大変なことだ。

●憤恚の鉢

黙示録第16章に入ります。

1我また聖所より大いなる声ありて七人の御使に『往きて憤恚の鉢を地の上に傾けよ』と言うを聞けり。

今度は「憤恚の鉢」だ。

2斯て第一の者ゆきて其の鉢を地の上に傾けたれば、獣の徽章を有てる人々とその像を拝する人々との身に悪しき苦しき腫物生じたり。

これはみな皇帝崇拝のものです。「獣」とはネロとかドミティアヌスとかを表す。

3第二の者その鉢を海の上に傾けたれば、海は死人の血の如くなりて海にある生物ことごとく死にたり。

大変なことだ。これもやはり出エジプト記7章に出てくる、水が血に変わったような事と相呼応します。

4第三の者その鉢をもろもろの河と、もろもろの水の源泉との上に傾けたれば、みな血となれり。5われ水を掌どる御使の『いま在し昔います聖なる者よ、なんじの斯く定め給いしは正しき事なり。6彼らは聖徒と預言者との血を流したれば、之に血を飲ませ給いしは相応しきなり』と云えるを聞けり。

その報いは逆に血になるという。ダンテの『神曲』の地獄篇の方を見ると、その罪に丁度

合ったような罰を受けることをダンテは書いている。傲慢な奴は大きな重い荷物を背負わされて、屈まざるをえない。「聖徒と預言者」とは、預言者と使徒また一般の本当のキリスト者のこと。「聖徒」というのは

「神の聖を与えられた者」

ということで、それ自身が聖いとか聖くないとか、そういうことではない。

「神・キリストのものとされた者」

が聖徒です。

7 **我また祭壇の物言うを聞けり『然り、主なる全能の神よ、なんじの審判は真なるかな、義なるかな』と。**

ここのところはわざわざ、

「なんじの審判は真なるかな、義なるかな」

と書いてある。

今、世界の歴史を見ていれば、個人の生涯を見ても、世の中は不合理な事はたくさんある。混沌としている。なぜ神さまはこれを放っておかれるのかなと思う。

最後に総決算がくる。神さまは見過ごしていらっしゃらない。地上ではサタンのやつに勝手にやらせておく。けれども、勝手にやらせておくところのサタンに対して、キリストも力をもって戦っている。それはみな十字架の道を歩きますけれども、決して空しくない。必ずそれらしき地位を天上で与えられる。サタンの方は大いに栄えていると思ったら、どっこいこれは地獄へいく。人間の判断以上のことをキリストは、神さまはなさるから。相対的な現実でも、時が審くという。本当の事は分かってくる。ただ分かるでは困る。ただ分かるのではなくて、本当のものは本当の所に置くところの国が、最後の大審判の後の新天新地の世界なんです。

●何が本当の本当か

では、一体何が本当の本当か、ということです。本当のキリストの愛に生きた人たちです。これが本当の本当です。

「困っている人に水一杯を与えたか」

と。キリストの言葉はマタイ伝24章にでている。羊と山羊に区別した。天国に行けるか行けないかの区別はそれで決めると、キリストが仰った。

リンカーンがアメリカの第16代大統領に当選した。幹部の役人たちに訓示を与える時に、人々は

「さて、リンカーンはどんなことを言うか」

と、その大方針を聞きたいと思った。ところが、こういうことを言った。

「自分は少年の時に、港のはしけの船頭をして、非常に辛い生活をした。ところが、

ある時、一人の紳士が重いカバンを持っていたので、見かねてそれを助けてあげました」

と。リンカーンはそういったことがいくらでもある。

「キリストの道は真なるかな、妙なるかな、義なるかな」

というわけだ。

「私の信仰がだいぶ深くなりましたので、段々そうなってきました」

なんて、そんなことではありません。ぶっ倒れたから、始まったんです。自分を何ものともしなくなったから、動き出したんです。この福音を受けとって、その角度から、皆さん一人ひとりが動き出さなかったらしょうがない。いや実に、私たちの召団は天下一品の召団なんだ。キリストの故にだよ、こっち側の故にではない。何者でもなくなったからなんです。

無なる存在はキリストの中に隠れているから見えない。パウロがそうだ、ヨハネがそうだ、ペテロがそうだ、ヤコブがそうだ。使徒たちはみなその現実です。彼らの色彩は四つの色で違う。いいんです。大いに違ってもらわなければ。同じ花ではないんだからみな違う。けれども、これはみな同じ水を吸っている。同じ太陽の光に当たっている。絶対なる恩寵によって、現象するところのものは様々でなければならない。いわゆる全体主義はダメです。それが本当に自由の姿なんです。

8第四の者その鉢を太陽の上に傾けたれば、太陽は火をもて人を焼くことを許さる。

これは大変だ。

9斯て人々烈しき熱に焼かれて、此等の苦難を掌どる権威を有ちたもう神の名を瀆し、かつ悔改めずして神に栄光を帰せざりき。

いよいよもってダメだな。こういうのではもうしょうがない。この黙示録というのは大変なことが書いてあるね。太陽の熱でみな焦げてしまう。

10第五の者その鉢を獣の座位の上に傾けたれば、獣の国暗くなり、その国人痛みによりて己の舌を齧み、11その痛みと腫物とによりて天の神を瀆し、かつ己が行為を悔改めざりき。

いよいよもって、やけくそになって、サタンの手下になってしまう。

12第六の者その鉢を大いなる河ユウフラテの上に傾けたれば、

バビロニヤの方だ。

河の水涸れたり。これ日の出づる方より来る王たちの途を備えん為なり。13我また龍の口より、獣の口より、偽預言者の口より、蛙のごとき三つの穢れし霊の出づるを見たり。

「偽預言者」はみなサタンから来ている。最後になると、偽預言者が出てくるんです、

「俺はキリストだ」
というようなやつが。

●ハルマゲドンの戦い

14 **これは徴をおこなう悪鬼の霊にして、全能の神の大いなる日の戦闘のために全世界の王等を集めんとて、その許を出でゆくなり。**

「悪鬼の霊」だから、これは大変だ。悪魔の大軍がそこに集合されるわけだ。

15 **（視よ、われ盗人のごとく来らん、裸にて歩み羞所を見らるることなからん為に、目を覚してその衣を守る者は幸福なり）**

「われ盗人のごとく来らん」
と、キリストはおもしろいね、「盗人のごとく」なんていう言い方をする。
「いつ来るか分からんぞ、目を覚ましていろ」
と。「その衣」とはキリストの義の衣です。

「キリストを着よ」

とパウロが言ったでしょ。私たちはキリストの義の衣を着る。キリストの天衣無縫の衣です。キリストという衣は縫ってない。

16 **かの三つの霊、王たちをヘブル語にてハルマゲドンと称うる処に集めたり。**

「ハルマゲドン」はナザレの南方の所にあって、ヒシオ川の流域にある。エスドラエロン平原の一箇所の要害の地です。「ハル」というのはヘブライ語で「山」という字で、「メギドンの山」という意味です。「メギド」というのは歴代志略下35章、列王記略下9章、士師記1章、5章にいろいろ戦争のことが出ています。「ハルマゲドン」というのは、我々が「関ヶ原」というのと同じで、いよいよ、天軍と魔軍との最後の決戦なんです。その戦いのこと自身はここに詳しく書いてあるわけではないけれども。

17 **第七の者その鉢を空中に傾けたれば、聖所より、御座より大いなる声いでて『事すでに成れり』と言う。18 斯て数多の電光と声と雷霆とあり、また大いなる地震おこれり、人の地の上に在りし以来かかる大いなる地震なかりき。**

という大地震がきてしまった。

19 **大いなる都は三つに裂かれ、諸国の町々は倒れ、大いなるバビロンは神の前におもい出されて、劇しき御怒の葡萄酒を盛りたる酒杯を与えられたり。20 凡ての島は逃げさり、山は見えずなれり。21 また天より百斤ほどの大いなる雹、人々の上に降りしかば、人々雹の苦難によりて神を瀆せり。是その苦難甚だしく大いなればなり。**

いくら魔軍が来ても、ひとたび神さまが上からやってくればひとたまりもない。魔軍を

やっつける神さまの武器は何かというと、光なんです。光で目が眩むんです。見てられない。しかも熱を持っている。熱を持った光がバーッと来たら、もうこれはどんな大砲をもっていたってどうにもならん。大体、敵に向かえないのだから。人間の一番大事なのは目だから、光でもって目がつぶされてしまう。だから、光が最大の、神さまの愛の光であると同時に、審判の光でもある。活かす光であると共に滅ぼす光でもある。凄いよ、これは。だから、太陽というものは大変なものだ。

ハルマゲドンの戦いは、誰もそこで何で勝ったかと書いてない。私は光だと直感した。光は恩恵（めぐみ）であり審判である。キリストの十字架が恩恵であり審判であるように。

けれども、どこまでも恩恵は審判に勝つ、審判を覆う。愛は一切のものを覆うんです。包んでしまう、また担ってしまう。その愛を受けとりそこなったら、もうお終いです。そうして、彼らは悔改めない。「悔改めざりき」と書いてあるでしょ。これは自分で地獄へ、第二の死へ行こうというのだからしょうがない。魔軍が何億いようが、神さまの光にはどうにもならん。だから、私たちは本当に光の人にならなくてはいかん。

ドイツのヒットラーが勝手なことをした時に霊的な女性が、

「ヒットラーは間違えている。こんな事をしたらドイツは亡びる」

と示されて、そのことを言ったら、ヒットラーは

「けしからん、あいつを殺せ」

と使者をやった。使いに行った兵隊がピストルでその女性を撃とうとしたら、その女性の神々しさに参って撃たなかった。帰ってきて、

「撃ちました」

と嘘を言って報告したという。それは女性から発しているところのキリストの光だよな。救世軍のブース大佐の奥さんをヤクザが刺そうとしたけれども、刺せなかった。これは同じことです。やはり光の世界です。

「汝らは世の光なり」

とキリストが言われたでしょ。これは、

「本当に救の光である私を受けとれば、お前たちは影のない人になるぞ」

ということです。内側から光るのだから、影はなくなる。自分の中からただ一つの光が発すれば、それでいい。

●真理に即如

ここに少年少女たちがいますが、もうあまり遊ばせないで、ここでジーッと聞かせろ。それを制するくらいのお母さんにならなくてはダメだ。一時間位、分からなくたっていいからジーッとしていろと。そうすると、気合を受けとっていくんです。意味ではない。気合を受けとる。

「なるほど、我々の福音は」

と、小さい時からそれが響いていくからね。来年からは、もう遊ばせるのはよそう。それは半分冗談ですけれども、本当ですよ。

ハルマゲドンの戦いの最後の決戦も、ところが我々は毎日、ハルマゲドンの決戦をやっていくわけだ。毎日、光をもって。そして、そのことを体験していく。光は救わんとしている。その救わんとしている光に対して刃向かう奴はこの光に撃たれる。相手の態度自身で、同じ一つの光が撃ったり救ったりする。

日本の国旗は太陽ではないですか。

「心に太陽をもて」

というが、本当は

「汝自身、太陽となれ」

なんです。キリストという義の太陽を受けとると、白地に赤く太陽が輝く。世界最高のものは

「崇高なる単純性」

という。ギリシアの芸術がそうだという。日本の国旗がそうです。私はお正月は元日から三日間、国旗を掲げておく。三日間、この太陽の国旗を掲げて、私は冥想するわけです。

真理に即如。真理に即してくださいよ、考えている世界ではないですから。即如、一如。キリストと即如一如の境地に入る。そうすると、光となり、塩となり、水となり、火となり、自由自在です。

ベートーベンの第九シンフォニーの第四楽章、あの大合唱のところへ我々は来たわけだ。

「相抱けよや千万（ちよろず）の人々よ！
この接吻（くちづけ）を遍（あまね）く世界に！
同胞よ！　星の幕屋のかなたには
愛の御父（みちち）ぞ住み給う。」

というシラーの詩をベートーベンがあの合唱にした。けれども、あの歌っている連中が本当にその境地で歌っているかというんだ。

芸術も何もみな、第一流のものは根底はそこから来ている。なぜバッハが凄いか、何とかかんとか言っていて、そこを捕まえないで、バッハが分かるかと、ベートーベンが分かるかと、シューベルトが分かるかというわけです。

だから、この福音を受けると、仏教の第一流のものもみな見えてくる。もの凄いんです、この福音の世界は。東西の真理をみな包含してしまう。宇宙的な豊かさがでてくる。